

学位論文題名

事実的な生の解釈学と方法的無神論

－初期ハイデガー哲学とキリスト教との関係をめぐって－

学位論文内容の要旨

本論文はハイデガーの学位論文(1913年)前後から、1927年の講演「現象学と神学」までを扱い、キリスト教との関係を中心に初期ハイデガー哲学の形成過程を再構成しようとしたものである。近年ハイデガーの初期の講義録が公刊されたことに伴い、初期ハイデガー哲学に関する研究成果が蓄積されつつあるが、その多くは講義録の内容の整理や諸概念の解説に止まっている。本論文は初期ハイデガー哲学の中心的概念である「事実的な生」や「形式的告示」の内実が、原始キリスト教の「生」に対するハイデガーの解釈によって与えられることを示し、空虚な概念整理に終始しがちな初期ハイデガー研究に一石を投じようとするものである。また、ハイデガー哲学の形成過程をキリスト教からの離反として特徴づけようとする従来の研究とは対照的に、ハイデガーの「無神論」的立場を積極的に評価し、ハイデガーのいわば「方法的無神論」と言うべきものがハイデガー哲学の核心部分をなすという、大胆な提起を行っている。こうした観点のもと、フッサール現象学やディルタイ解釈学の摂取を通じて彫琢されていく初期ハイデガーの概念群が新たな視点から解釈されていくことになる。

第一章では、フライブルク大学戦時緊急学期講義(1919年)以前の時期のハイデガーの思想的背景を明らかにすることが試みられている。この時期にハイデガーはカトリックの「システム」に対する違和感を覚え、カトリックから離脱することになるが、この離脱が、必ずしもキリスト教信仰そのものへの疑いを意味しないことが強調される。またこの時期は、フッサール現象学を摂取した時期にもあたるが、ハイデガーがフッサール現象学を「抽象的で理論的な知」として捉えていたことも指摘され、カトリックからの離脱やフッサール現象学に対する態度が、第二章で主題的に扱われる「事実的な生の解釈学」の背景を為すことが明らかにされている。

第二章では、ハイデガー哲学の出発点とも言える戦時緊急学期講義が扱われ、「事実的」という言葉の意味の検討が行われている。また、初期フライブルク期のハイデガー哲学の重要な概念である「形式的告示」が、その内実においてすでに戦時緊急講義において示されていることが指摘されるとともに、この「形式的告示」の概念が、フッサールの言う「記述」の概念を批判的に継承したものと見なしうることが論証されている。戦時緊急学期講義においてすでに「神学」の理念一般に対する疑念が表明されていることも指摘されている。さらに19/20年冬学期講義及び20年夏学期講義で試みられたディルタイ哲学の「解体」について触れられ、歴史と「事実的な生」の関係に関するハイデガーの考察が検討される。

第三章では 20/21 年冬学期講義及び 20 年夏学期講義を中心に、ハイデガーの「宗教現象学」の構想が主題的に扱われている。宗教現象学の構想自体はこの時期以後放棄されることになるが、宗教現象学の試みの中で、「事実的な生」の概念が、新約聖書やアウグスティヌスの『告白』の読解を通じてその内実を与えられ、ハイデガーの言う「事実的な生」は、原始キリスト教における「生」のあり方をモデルにしていたことが説得的に示されている。また、ハイデガーがエックハルトの「突破」の概念とフッサールの「現象学的還元」を重ね合わせて理解しようとしていたという指摘は、ハイデガーが「宗教現象学」として目指していた方向を探る上で、興味深い視点を提供している。

第四章では、ハイデガーに対するオーヴァーベックの影響が検討される。神学者でありながら、神学に対して厳しい批判を向けたオーヴァーベックの思想が、「学」(Wissenschaft)としての神学に対するハイデガーの懐疑的態度を強め、「原理的な無神論」をハイデガーが主張する機縁になったことが指摘されている。従来の研究では、オーヴァーベックとの出会いによって、ハイデガーのキリスト教への関心が薄れていったとする捉え方が一般的であった。これに対して筆者は、オーヴァーベックとの出会いはむしろ、神学とキリスト教信仰との関係を問い直すことになった機縁として捉えるべきであることを主張している。

第五章では、1922 年頃に書かれた草稿「アリストテレスの現象学的解釈」を中心に、「原理的に無神論的」という表現の意味の検討が行われ、「無神論」が初期ハイデガー哲学の「根本性格」であることが強調される。(なお筆者は、コヴァックスにならい、ハイデガーの「原理的に無神論的」な立場を「方法的無神論」と呼んでいる。)また、21 年夏学期講義でのルターに関する言及を資料として、ハイデガーによるパウロ書簡解釈や、アリストテレス解釈に対するルターの「十字架の神学」の影響について検討が行われている。

第六章では、「アリストテレスの現象学的解釈」が再び取り上げられ、そこで示されたプロネーシス概念の解釈が、『存在と時間』における現存在の日常性の分析を先取りするものとなっていることが指摘されている。また、25/26 年冬学期講義における、アリストテレス『形而上学』第 9 巻第 10 章の解釈が取り上げられ、『存在と時間』の立場が、アリストテレス形而上学との対決を経て生じてきたものであることが指摘される。

第七章では、1927 年刊行の『存在と時間』を中心に、基礎存在論の基本的な構造が確認されるとともに、「気苦労」(Bekümmernis)から「気遣い」(Sorge)へといった用語の変化から、「非-存在論的」な表現の排除が意図的に行われていることが確認され、このことはまた、ハイデガーが初期の「事実性の解釈学」を撤回していることを示しているものとされる。

第八章では、1927 年の講演「現象学と神学」が取り上げられ、「(神学の) 矯正」という概念に焦点が当てられる。『存在と時間』の基礎存在論の立場からすれば、「存在的な学」としての神学は基礎存在論によって基礎づけられるべきものである。ところが、神学の対象となるべき「信仰」は「哲学を必要としない」とハイデガーは主張し、基礎存在論の枠組みが神学には適用され得ないことを示唆している。哲学は神学を「矯正」という仕方でのみ、神学に関わることができるのである。この「矯正」が具体的にどのような関係であり得るのかをテキストから読み取ることは困難だが、筆者は、ハイデガーのこうした概念構成の試みのうちに、「学」ではない「神学」、つまり、「神について語ること」としての Theo-logie の可能性をハイデガーが模索していたことを示そうとしている。

付論では、ブルトマンやオットらによるハイデガー哲学の受容の概略がまとめられ、ハイデガー哲学を神学的に読み替えていく可能性について検討が加えられている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 新 田 孝 彦

副 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 助 教 授 石 原 孝 二

学 位 論 文 題 名

事実的な生の解釈学と方法的無神論

－初期ハイデガー哲学とキリスト教との関係をめぐって－

本論文はハイデガーの学位論文（1913年）前後から、1927年の講演「現象学と神学」までを扱い、キリスト教との関係を中心に初期ハイデガー哲学の形成過程を再構成しようとしたものである。近年ハイデガーの初期の講義録が公刊されたことに伴い、初期ハイデガー哲学に関する研究成果が蓄積されつつあるが、その多くは講義録の内容の整理や諸概念の解説に止まっている。本論文は初期ハイデガー哲学の中心的な概念である「事実的な生」や「形式的告示」の内実が、原始キリスト教の「生」に対するハイデガーの解釈によって与えられることを示し、空虚な概念整理に終始しがちな初期ハイデガー研究に一石を投じようとするものである。また、ハイデガー哲学の形成過程をキリスト教からの離反として特徴づけようとする従来の研究とは対照的に、ハイデガーの「無神論」的立場を積極的に評価し、ハイデガーのいわば「方法的無神論」と言うべきものがハイデガー哲学の核心部分をなすという、大胆な提起を行っている。こうした観点のもと、フッサール現象学やディルタイ解釈学の摂取を通じて彫琢されていく初期ハイデガーの概念群が新たな視点から解釈されていくことになる。

ハイデガーとキリスト教の関係については、すでに膨大な研究の蓄積があるが、ハイデガー哲学そのものとキリスト教の関係を正面から論じようとしたものは意外と少ない。本論文の特徴は、初期ハイデガー哲学をキリスト教との関係から捉え直すという視点を打ち出したことにある。そうした視点の下で、ハイデガーの言う「事実的な生」が、原始キリスト教における「生」のあり方をモデルにしていたことが説得的に示されたことが本論文の最大の成果であろう。さらに、ハイデガーの当初の「宗教現象学」の構想がオーヴァーベックの影響を受けながら「方法的無神論」へと転回していくという論点は、従来の研究には見られなかった指摘であり、未だ論証すべき点は残っているものの、斬新な解釈を提示したものである。また、個別的なトピックに関しても、初期ハイデガーの方法論を理解する上で重要な概念である「形式的告示」の概念をキリスト教神学との関係から捉えなおすことを試みた点や、ハイデガーがフッサールの「現象学的還元」とエックハルトの「突破」の概念を類比的に捉えようとしていることを指摘したことなど、初期ハイデガー哲学を理解する上で興味深い視点を提供している。

審査の過程では、本論文が、ハイデガーの思想形成史に関して斬新な解釈を提起してい

ることや、ハイデガーとキリスト教の関係という困難な問題に関して意欲的に取り組んでいる点などが評価された。他方でまた、時系列に従った構成が、キリスト教とハイデガー哲学の関係という問題を扱う上でうまく機能していないのではないかという懸念が出された。また、方法的無神論という概念に関しては、未だ解明すべき点が多く残されていることが指摘された。しかしこうした個別的な欠陥は、本論文の全体的な価値を損なうものではない。本審査委員会は全員一致で、香川哲夫氏が博士（文学）の学位を受ける資格があるものと判定した。